平成 22 年(2010) 3 月 31 日

2号

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌　年２回発行

平成 21 年度秋季企画展「やおの中世－村々の成立とくらし－」から

1．はじめに

21 年度の秋季企画展として、八尾市内の平安時代後期から室町時代中期(11 世紀から 15 世紀)に至る中世時期を対象とした『やおの中世－村々の成立とくらし－』と題した企画展を行いました。

展示では、「Ⅰ八尾の村々の成立」、「Ⅱ村々のようす」、「Ⅲくらしと遺物」、「Ⅳ中世寺院といのりの世界」と題した小題を設け、考古学成果による視点から垣間見られる具体的な中世時期の八尾の実態に迫ってみました。ここでは、それらの一部を抜粋して紹介します。

2．中世の八尾

八尾市内の中世における行政区画は、平安時代前期(10 世紀前半)に書かれた『和名類聚抄』によれば、河内国の高安郡、若江郡、渋川郡、志紀郡、河内郡、丹北郡、大県郡にまたがっています。市域東部の生駒山地西麓部には京都と高野山を結ぶ「東高野街道」が南北方向に延びています。このような主要幹線道路を介して古代・中世の政治中枢であった地域に近接した地理的条件も相俟って、平安時代後期の「院政期」には数多くの貴族・大寺社の荘園が市内の各所に設けられました。

また平安時代後期には、釈迦入滅2,000 年を画期とする末法思想の社会的救済の一環として、浄土信仰を中心とした寺院が全国各所で作られており、市内においても中世寺院を 28 ヶ寺確認しています。飛鳥時代から奈良時代に建立された古代寺院が市内で７ヶ寺であったことを考慮すれば、中世時期に建立された寺院がいかに多かったことを窺い知ることができます。

中世の畿内と八尾に荘園を持つ本家・領家の位置
(▲が本家・領家の位置と寺社名)

目次

●平成 21 年度秋季企画展『やおの中世－村々の成立とくらし－』から(ｐ１～３)
１．はじめに　２．中世の八尾　３．八尾の中世集落と荘園　４．八尾の中世寺院
●考古学よろずコラム(ｐ４)　●イベント案内(ｐ４)　●編集後記(ｐ４)

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌『八尾・よろず考古通信　２号』　2010 年３月 31 日発行
発行：八尾市立埋蔵文化財調査センター、編集：(財)八尾市文化財調査研究会　〒581-0821　大阪府八尾市幸町四丁目 58－２
TEL・FAX 072－994－4700 URL http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun　E-mail:maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp

3. 八尾の中世集落と荘園

平安時代後期の院政期(1086～1221 年)以降、河内では、平氏や河内(石川)源氏などを中心とした武士勢力が台頭していきます。このような地方武士の成長を支えたのは荘園の経営でした。武士は開発した領地を中央の貴族や寺社に寄進して荘園とし、自らは荘官となることで勢力を伸ばしていきました。また、荘園を寄進された寺社も大きな力を持つようになりました。大和や京都に近い河内においても、多くの貴族や有力寺社の荘園が形成されました。荘園は中世の基本的な土地制度であり、中世社会の基盤でもありました。

八尾市内で中世時期の荘園経営の具体的な事例を示す集落として矢作遺跡が挙げられます。延久四(1072)年の『石清水文書』には、若江郡掃部別宮に御供田五町九段があったことが記されています。掃部別宮とは、石清水八幡宮の末社にあたるもので、物部氏系氏族である矢作氏に関わる神社が荘園の発展とともに中世には、武士の守り神である八幡宮が勧進され荘園鎮守社として変化した様子を知ることができます。

荘官級の有力者の住居跡
(矢作遺跡　第１次調査地)

向山瓦窯出土瓦
〈平安時代後期(12 世紀前半)〉

荘園と瓦つくり　～向山瓦窯～

八尾市北東部にある向山瓦窯(大竹八丁目)では、平安時代後期に瓦が生産されていました。向山瓦窯で作られた瓦は、京都平等院の康和三(1101)年の鳳凰堂の修理の際に使われていたことが発掘調査で明らかになっています。向山瓦窯の西方約 1 kmには平等院領の玉櫛庄(八尾市北東部から東大阪市南東部)があり、諸記録から玉櫛庄が平等院の修理に関わる瓦を供給したようで、荘園と領家との具体的な関わりを示す事例の一つと考えられます。

八尾市内における中世時期の荘園と村々の推移図

4．八尾の中世寺院

古代末期にあたる平安時代後期は、末法思想の浸透とこれに基づく浄土信仰が発展した時期で、仏教が広く庶民に浸透しました。そのため、飛鳥・奈良時代と肩を並べるほど寺院が爆発的に増加しました。

この時期の瓦文様は、瓦生産の地方への拡散とも相まって多様で、蓮華文の他、梵字・漢字・五輪塔・仏像・名号を入れたものなどがあります。また、瓦窯としては、京都平等院に瓦を供給した向山瓦窯(大竹八丁目)があります。

八尾市内出土の中世瓦類

市内の中世寺院には、古代寺院から継続する高安郡内の心合寺・高麗寺・教興寺、若江郡内の西郡廃寺・弓削寺跡があります。平安時代後期～室町時代に成立する寺院には、高安郡内の楽音寺・大光寺・薗光寺・感応院(神宮寺)、若江郡内の地蔵院・恵光寺・穴太廃寺(千眼寺)・新堂寺・新泉寺・常光寺・西方寺・龍華寺跡・金性寺・善坊寺・金剛蓮華寺、渋川郡の慈願寺・西証寺(願証寺)・久宝寺・千光寺・真観寺・勝軍寺、丹北郡の塔ノ本廃寺があります。

このように、平安時代後期から室町期にかけて、数多くの寺院が建立されました。しかし、南北朝の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱、織田信長の近畿統一や大坂の陣等の戦渦、さらには明治元年の廃仏毀釈により、数多くの寺院が廃絶しました。そのうち、教興寺・感応院(神宮寺)・恵光寺・常光寺・善坊寺・慈願寺・西証寺(願証寺)・真観寺・勝軍寺が現在に残っています。一方、発掘調査により寺院建物が検出された例は穴太廃寺(千眼寺)や善坊寺程度で、不明な点が多い状況です。

八尾市内の中世寺院と中世瓦出土地

考古学よろずコラム
第2回

八尾市出土の主な遺物や遺構を紹介します。

近畿地方最古級の鋳造鉄剣（ちゅうぞう）　（市指定文化財　大竹西遺跡出土 鉄剣）

鉄剣

鉄剣は、八尾市立屋内プール建設に伴う大竹遺跡第３次調査（八尾市上尾（かみお）町七丁目）を実施していた平成９年（1997）１月28日に土坑内から発見されました。

鉄剣が出土した土坑は、東部が溝、上部が河川に削られ旧状を留めていませんが、残存部分から概ね南西ー北東方向に主軸を持つ隅丸方形で、幅0.6m以上、長さ1.2m以上程度のものであったと推定されます。鉄剣は、土坑底から５㎝程度上部に水平に設置された羽子板状の木製品上に切先（きっさき）を南西方向に向けた状態で出土しました。

鉄剣は完形品で、剣長35.8㎝、剣身長33.7㎝、剣身幅3.6㎝、剣身厚0.6㎝、茎（なかご）長2.1㎝、茎幅1.8㎝、重さ225ｇを測ります。鉄剣と共に出土した弥生土器から弥生時代後期前半に埋められたものと考えられます。その後のＸ線透過による分析で、鋳造段階に発生する鬆（す）の存在が認められたことから、近畿地方最古級の鋳造鉄剣であることが判りました。鉄剣は、近接戦闘用武器として弥生時代中期に出現するもので、中期には中国製、朝鮮製の鉄剣が普及しますが、弥生時代末期には国産品が流通したものと考えられています。その中で、剣身長の違いから長剣と短剣に分類されています。本鉄剣は長剣にあたるもので、茎部は茎長が剣身幅より短い短茎式で、剣身下端に２個の目釘孔が穿たれています。本例のように長剣で短茎式の鉄剣は、弥生時代中期中葉以降に出現するもので、朝鮮半島に類例が求められます。しかし、朝鮮半島からは鋳造鉄剣の出土例が無いことから、国産の鋳造鉄戈を製作した北部九州で製作された可能性が指摘されています。

大竹西遺跡出土の鋳造鉄剣は、国内における鉄鋳造の開始時期や製作場所を考える上で多くの課題を残す結果となりました。

鉄剣と板状木製品出土状況

鉄剣出土土坑検出状況

展示予告　通常展「八尾の地宝ー埋蔵文化財調査センター収蔵品ー」

内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の出土遺物を中心に展示
日時：平成22(2010)年3月3日(水)～6月18日(金)
場所：八尾市立埋蔵文化財調査センター　八尾市幸町四丁目58－2
　　ＴＥＬ・ＦＡＸ072-994－4700
時間：9:00～17:00(入館は16:30まで)

編集後記

平安時代後期～鎌倉時代の寺院が市内で28宇を数えた。古代寺院が7宇であることを思えば如何に仏教文化がこの時期に昇華したかを示している。平安時代後期の永承七(1052)年は、釈迦入滅から2000年目の仏法の衰退や仏の教えが通用しない末法元年にあたる。さらに、この時期は摂関政治から武士の台頭した動乱期とも符合し、戦乱や天災による民衆の精神的な疲弊感・閉塞感は計り知れないものであった。まさに「世も末だ」の慣用句に集約される時代。「無常の世」の救済策として成立した鎌倉新仏教に民衆が帰依し救いを求めた結果であろう。28宇の数字が雄弁に語っている。〈MH〉